

## ヘルマン・ヘッセに於ける キリスト教的重圧と覚醒

井 手 貢 夫

ヘルマン・ヘッセの生涯を概観して気づいたことは、ヘッセが幼時、殊に家庭内での教育によって着せられた衣服が、どうにも体に合わなくて、次第にそれに反抗して、ついに一枚一枚と脱ぎ捨てて行って、ようやく裸の身になってはじめて、自由に落着いて、自分の一生を全うした、ということである。

こういう言い方は非常に刺戟的で、物議をかもす怖れがなくはないが、以下私の考え方を述べて見よう。

ヘッセの親しい友であって、ヘッセの意見や考えを常に聞きながら、ヘッセに関する最初の、しかも非常に卓越した評伝を書いたフーゴー・バルが、詩人ヘッセがそのヘルマンという洗礼名を、父方及び母方の祖父からもらったことについて、「誰か子供のとき、その洗礼名に悩まなかつただろうか」といって、その後に「以前には、大きくなつた新発意は、その俗世の洗礼名と共に彼の自我をも取去つて、そのかわりにある仮面としての名前を、それまでの自分とは縁のない、もっと高い、聖徒名簿に入った自我を、いわば接木する習慣であった。しかし今日の我々は……生れながらの自我で満足してはならないのだろうか。……両親の強大な才能が我々を吸収し、我々の自我を奪おうとするならば、また善悪いはずの性質のものにせよ、ある教育が我々の独自の意志を破り、我々を襲撃しようとするならば——この名は独自の、新しい、新たに始まる生命と活動とへの我々の特別な権利を許容しないといふのか。」

両親は息子ヘルマン・ヘッセに、その父祖以来のシュワーベンの敬虔主義の伝道師としての家系をつがせたかったので、マウルブロンの神学校を受験せしめた。ヘッセは幸いに36名の合格者のうち28番目の成績で合格した。ヘッセ14歳の時である。しかし13歳の時にヘッセははつきり

自覚していたのである。「自分は詩人となるか、それとも何にもならないか」ということであった。」結果は明白であった。1891年9月に入学したヘッセは半年余りしかたない翌年3月7日に「突然内面からの嵐」におそわれて、神学校を発作的に逃走する。まもなく発見され、連れもどされたが、ついに神学校を去って、1895年チュービンゲンの書店に勤めるまで実に様々な試みと挫折とを繰り返して、その間に自殺の試みまでしている。これが日本で最も多く読まれた「車輪の下」の題材となっていることは有名なことである。

しかしへッセが13歳に詩人以外の何者にもならない、と固い決心をする前に、すでに両親の善良な家庭のしつけの中で、ヘッセが後に「デーミアン」の中で記述している通り、明るい善の世界と暗い惡の世界との対立に悩んでいる。しかしこの解決はヘッセにとって詩人になることよりもある意味ではもっと困難であった。というのは詩人となった後にも彼はこの問題の解決のために苦惱しなくてはならなかつたからである。

ヘッセは出世作「ペーター・カーメンチント」を以て一躍ヨーロッパに有名になった。この作品は反都会的であり、反文明的であり、自然を友として育ち、都会の生活に失望して、故郷のスイスの自然の中にもどって、自然を題材にした作品を書くことを望みつつ、老父の世話をしながら終っている。そしてこうした自然礼讃が当時丁度盛んになりつつあった自然保護運動の基盤の上にヘッセの作品を一躍ヨーロッパ全土に拡げる結果になったのであるが、その自然とヘッセとを結びつけたものは、家庭のしつけに自己を抑制し得なかつた幼いヘッセの不満とうつ憤りであった。彼は彼の納得し得ない不満を家の裏手の広い野原で暴れまわることで晴らしたのである。しかし家庭でのしつけには愛があった。それはどんなに苦しく厳しいものであっても、両親の愛がまだしもそれを蔽い得たのである。しかし学校教育には一般的にはそれが充分でなかつた。そしてそれに対する怒りと不満とが「車輪の下」にこめられたのである。

ヘッセはしかしこの少年時代の危機を、神学校脱走後の煩悶と模索との後に、ともかく自立し、更に文学的な成功を得たことによって、そして新婚の生活の中に、一応糊塗することができたのである。しかしそれらはその平和で恵まれた市民的な結婚生活の中でしだいに沈漫して行つた。そして第Ⅰ次大戦が勃発した時、その非慘さと無謀さとを中立国ス

イスに住んでいて客観的に眺めることのできたヘッセは開戦後3ヶ月後にあの有名な「おおこの調子ではない」という反戦の文章を新チューリヒ新聞に発表したのである。この文章は非常に確かに且つ控え目にではあったが、戦争のためではなく、平和を早く将来するために働くことが文学・芸術・学問の世界に生きるもののが任務であることを説いた。しかし戦争の狂熱は当時ドイツ文壇の大立物であったゲルハルト・ハウプトマンを初め、トマス・マンにまで及んでいた。祖国ドイツのすべての新聞雑誌が売国奴とヘッセを罵る中に、ドイツ国内で公然ヘッセを辯護した人はただ2人、その1人が大戦後の初代大統領になったテオドール・ホイスであった。しかし思いがけず敵国フランスからヘッセに同感の手紙をよせたのはロマン・ロランであった。祖国のすべての人から罵られ、しめ出され、生活にも困窮していたヘッセにとって、これがどれ程の慰めと力になったかは想像に余りある。ロランの友情がなかったら、ヘッセは立ち直れなかつたろうと、みずから述べている。

ヘッセの苦境は経済的精神的なものに加えて、家庭内にも、妻が精神的不安から入院、愛児の重病と重なって、ヘッセ自身が精神分析によつて精神の安定を得なくてはならないほどであった。しかもヘッセがこの時期、戦争に加わること以外の方法で祖国ドイツに尽したいと願つて、連合国内に捕えられていたドイツ人捕虜のために読物を提供するという仕事を引受けて、朝早くから夜おそくまで、事務的に奔走したことは特記されねばならない。しかもヘッセは国籍をドイツに置いたままにして、戦争の終結までスイスに移すことをしなかった。それも祖国ドイツを愛するがためであった。

ヘッセはこの苦悩の中で、初めて深い内面的な反省に立つたのであった。ユングの弟子ラングとの精神分析的対談はヘッセがその深い自己省察の中で予感していたものを明らかにしたのである。戦争の悲惨と害悪とを体験したヘッセは、しかしそうした戦争を惹き起した人々を責める資格が自分にはないと悟つたのである。醜いもの、怖るべきものは自分自身の内側にもあった。無意識の衝動を明るみにとり出し、それを整理し、単に明るい世界だけでなく、暗い無意識の世界をも救う神を彼は求めたのである。この時期ヘッセがドストエフスキイを論じたのも当然であった。シュペングラーの「西欧の没落」は西欧の文化もまた衰滅の時

を迎えることを説いて新しい文化の将来を期待したのであった。

その省察の結果が「デーミアン」となってあらわれた。ヘッセが幼年時代以来苦しんでいて、それをひたすら圧迫し押しこめていた暗い衝動の世界が解決を求めて来たのである。

ヘッセがこの解決を、無意識界の省察から従来唯物的に見られがちであった進化論を基礎にして、世界の展開の中に於ける自我の位置と任務とを自覚し、外部の神ではなく、自己自身の中に生きている永遠の生命の声を聞き、自己の使命を自覚して生きることに見出したことは新たな出発であった。それまで世間に愛読されていた自分の作品が今は全く無意味に思われ出したのも、新たな生命観の上に出発したその時の彼にとっては当然なことであった。この問題については既に他の所で詳説したことがあるので、ここでは詳しくは述べない。しかしへッセがこうした思想的展開によって、彼が生れた時に与えられた洗礼名による重圧から初めて脱れ得たことは特記しなくてはならない。これは神学校からの脱走が無意識的叛逆であったのに対して、明らかに自覺的な叛逆であったといわねばならない。そしてこの思想的展開が彼の自我への主張となってあらわれた。しかし更にこの自我の探究が試みられねばならなかつた。それが「シッダールタ」に於て確認されねばならなかつたのである。

「シッダールタ」に於てヘッセが探究した自我は進化論の上に築かれた仏教的生々流転の上に咲く愛の思想の中に放下されるべきであった。そしてガイエンホーフェンの家庭生活の経験から、いかに自分が市民的家庭生活に不向きであるかを充分に自覚していたにもかかわらず、1924年、47歳にして再び20代の若いルート・ヴェンガーと結婚するのである。そしてバーデンの療養生活の中から、傑作「湯治客」の中でアウトサイダーとして自己批判をしている。しかしその視野は更に拡げられて、時代の危機を先きどりして「荒野の狼」となって登場する。多くの批判と一方では絶讚を受けたこの作品の中で、ヘッセは初めて官能の世界を明らさまに描いた。そしてそれが後に「ナルチスとゴルトムント」に於て美事に花を開くのである。

「ナルチスとゴルトムント」には、ルートとの結婚生活が全く破綻し、その生活的危機をようやくくぐり抜ける頃にあらわれたニノンとの幸福な愛の生活が背景にあることであろう。しかし私はキリスト教の深い伝

## ヘルマン・ヘッセに於けるキリスト教的重圧と覺醒

統を受けついだ両親の家庭が、愛の問題についてどんなに厳格であったかを思い出さずにはいられない。ヘッセの母マリーはヘッセの初期の詩を読んでその中の恋愛の詩を好まなかったといわれている。ヘッセにとって従って性の問題はキリスト教的抑圧を受けていたと思われる。それはとも角としても、若いヘッセは、宗教家は芸術家にとって唯一のふさわしい敵である、といっている。洗礼名ヘルマンを受けついだヘッセにとって、性の問題は矢張り重荷であった。そのことは「デーミアン」に於けるペアトリチエへの愛の中にもうかがわれる。それを解放する用意を「シッダールタ」が準備した。しかし本当に解放されるためには「危機」と「荒野の狼」が必要であったのである。「荒野の狼」の主人公ハリー・ハラーは、官能の「魔術劇場」に入るために、湿った汚れた泥濘の中を渡って行かねばならなかつた。

ヘッセが官能の世界を扱った作品としては「廻り道」(小説集、1912年)におさめられていて、後には一時復刻されなかつた「パーター・マティアス」がある。カソリックの僧が一夜破戒して僧籍から離脱する物語である。注目すべき作品は「寓話集」におさめられた「書物を沢山持つた男」(1918年)である。書物に埋まって、古典作品を読んでいた間は落着いた静かな生活をしていたものが、近代の作品を読み進むに従つて精神の安定を次第に失なつて来て、ついには全くなす術を知らなくなつて街頭に出て、出会つた街の女の膝にすがりついて救いを求める話である。女が男をやさしく抱いて「助けてあげますよ」というのが甚だ印象的である。

「荒野の狼」の試作ともいえる「クライインとワーグナー」の主人公も二つの情事を重ねる。そしてこの情事は主人公の死の誘因となる。ヘッセにとってこうした情事はまさしくそうであったのであろう。これに対して「荒野の狼」の情事はむしろ主人公に感覚の喜びを教えて、精神の世界に対して感覚の世界を等置させる。サキソフォン吹きのパブロはまさに感覚世界の代表者である。そしてこの感覚の世界と精神との融和をうむのがユーモアである。そのとき魔術劇場の支配者パブロはモーツアルトと一つになつてあらわれる。そして「ナルチスとゴルトムント」に於てこの感覚の世界が芸術として花を開き、修道院長ナルチスの代表する理性の世界に対置される。こうした精神と生活の安定の上に立つて初

めてヘッセは、ナチスの暴虐からの救いとしての理想国カスター＝エンの「ガラス玉遊戯」を表現することができたのである。「ナルチスとゴルトムント」「ガラス玉遊戯」の二作は洗礼名に暗示される宗教的重圧からの真の解放であると共に、また同時に歴史を持つ宗教団体との和解でもあった。ナルチスとゴルトムントの友情及び「ガラス玉遊戯」の主人公クネヒトのベネディクト派のマリアフェルス修道院への派遣とそこでの滞在と親交とがよくそれを語っている。若きヘッセは「宗教家こそ芸術家の最もふさわしい敵」であるといったが、その晩年のヘッセを、あるカソリックの高僧が評して、「ヘッセこそは真に優れたキリスト者である。ただ彼が教團に属していないことが残念である」といった。

とはいってもヘッセは決して一つの宗派に属することはなかった。勿論キリスト教が彼にあっても支配的ではあっても、同時にインド・アジア的色彩の信仰に親しんでいた。そして彼自ら「自分は生涯宗教的であった。」といっている。

ヘッセのこの生涯の発展を跡づけて見て感ぜられることは、善悪の問題にしても、感覚と精神との等置にしても、すでにゲーテが若い時期にはつきり述べていることである。そのことをヘッセがいわば一生かかつて解決しなければならなかった、ということは、一方でゲーテの天才と、生来の自然兒としての捕われる所のない深い洞察力とがあったにしても、ゲーテの成育した環境がじつに自由であったことを思わねばならない。ゲーテの場合には芸術性と現実社会との融和こそ課題であったものが、そしてそこにシュタイン夫人という優れた女性の媒介があわたことがゲーテのどんなにか大きい幸であったが、同様の問題がヘッセにあってはアウトサイダーと市民生活との対立になったことは矢張り時代と環境の相違というべきであろう。善悪の問題にしても、ヘッセの場合宗教的伝統の重荷があったにしても、それは矢張り現代の神経症的過敏さと深刻さとがドストエフスキイ的悲劇に高められているといわねばならない。ヘッセが常にゲーテを学びつつ、同時にゲーテと戦わねばならなかつたということはむべなるかなというべきであろう。ヘッセにとってゲーテは決して最も愛し、最も楽しんで読んだ作家ではなかった。ヘッセの愛し楽しむ作家は他にいくらもいた。しかしそれらの愛する作家達のどれ一人としてヘッセにとって深刻な問題と重要な倫理的刺激になった者は、

## ヘルマン・ヘッセに於けるキリスト教的重圧と覺醒

いなかった。それらの誰一人としてヘッセとの戦いと対決とを必要とした者はいなかった。しかしゲーテとはヘッセは「繰り返し繰り返し思想的対話と思想的対決をしなくてはならなかつた」のである。「その一つが、数百のうちの一つが《荒野の狼》の中にあるのである」とヘッセは「ゲーテへの感謝」の中に書いている。

## Druck der christlichen Tradition bei Hermann Hesse und Hesses Erwachen

Ayao IDE

Hugo Ball schrieb über den Druck vom Taufnamen bei Hermann Hesse. Man weiss, wie tief Hesses Ich in seiner christlichen Familien-atmosphäre leiden musste. Er wollte sein Ich in dieser Tradition in "Demian" befreien. Dann suchte er das Ich in "Siddharta" in buddhistischer Seelenwanderung und Wiedergeburt mit Liebe aufzuheben. Danach kam ihm der Gegensatz von Bürgertum und Aut sider von neuem zum Bewusstsein, auch der Gegensatz von Sinnenwelt und Geistwelt. In "Steppenwolf" löste er das Problem mit Humor auf und in "Kurgast", dann wieder in "Narzis und Goldmund" mit Liebe und Verständnis. Besonders in "Narziss und Goldmund" konnte Hesse seinen christlichen Druck ganz auflösen. Im "Glasperlenspiel" besuchte Knecht Benediktinerstift und blieb dort zwei Jahre. Das bedeutet die letzte Auflösung von seinem Druck der christlichen Tradition. Hesse war in seinem ganzen Leben sehr religiös, nur gehörte er zu keiner christlichen Sekte. Goethe hatte schon in seiner Jugend gewusst, dass es sich um das Gute und das Böse nur in der Menschenwelt handle, und er betrachtete Sinnenwelt und Geistwelt als gleichwertig. Dass Hesse solche Auflösung im Vergleich mit Goethe mit seinem fast ganzen Leben erreichen musste, das kam einerseits aus seiner christlichen Tradition, andererseits von der gegenwärtigen, komplizierten, psychologisch gespannten Welt.